令和5年度 阿南町立阿南第二中学校 学校自己評価のまとめ（生徒・保護者・職員）

学校教育目標	めざす生徒の姿	総合評価と来年度の方向
心を磨く 体を育む 知を耕す ～学力・考動力の向上をめざす～	○主体的・対話的で深い学びから自分の考えを更新させながら学力を向上させる生徒 ○一人一人に居場所があり、相手の気持ちに寄り添い、自分事として共感ができる生徒 ○心身の成長を実感すると共に、ふるさとに愛着と誇りをもち、貢献しようとする生徒 本年度のキーワード 自ら 見通す⇔振り返る	多くの生徒、半数以上の保護者が授業のわかりやすさや楽しさを評価している。しかし探究的、協働的な学習や、セルフマネジメントについては、課題がある。 生徒たちの相手意識も概ね高く、実際に集会活動や全校授業でもお互いを尊重して関わることができており、休み時間も学年の垣根を越えてともに楽しむことができている。 体力向上や規則正しい生活については、保護者や教師の評価はまだ改善の余地がある結果となっている。 来年度は、主体的・協働的な学び、探究的な学びの実現に一層力を入れると共に、地域との関わりや小中の連携を効果的に活用して本物に触れる機会を大切にしていきたい

（5段階の平均得点）

	評価項目	実績・成果・課題など	平均点
知	授業改善	ICT機器を活用した学習形態や追究の工夫がなされている。今年度は授業を見あって意見交換をすることで授業改革を進め、単元内自由進度学習の要素を取り入れたり、ドリル学習を位置づけて基礎的な知識技能の定着を図ったりしている。ねらいを明確にし、それに沿った振り返りを大切にすることや、少人数の利を生かした改善を心がけたい。	3.7
	学びへ向かう態度	これまでより学習に向かう姿勢が主体的になり、計画的な学習や自己選択決定型の家庭学習を行う姿も見られるようになってきた。来年度はすべての教科や家庭学習を含め、生徒自らが自身の成長や解決への見通しをもって追究の仕方を工夫したり、粘り強く追究したりする姿を目指していきたい。	4.0
	探究的に学ぶ	各体験や校外学習をコロナ禍以前と同様に行うことができるようになったことで、体験的に学ぶ場が増えた。また地域と関わる学習の場も増えた。来年度は学級総合を中心に、地域の人、物、ことを題材とした探究的な学習を充実させていきたい。	3.4
	セルフマネジメント	見通しをもち、優先順位を考えたり方法を工夫したりしてよりよい生活を行うことについて、改善の余地がある。方法や手立てを検討し、小中の連携も意識した活動を通して、環境や状況に応じたセルフマネジメントができるようにしていきたい。	3.0
心	協働して取り組む	様々な場面で協力し合う姿が見られた。授業でも教え合ったり、相談し合ったりしながら協働的な学びが充実してきている。今後さらに人数が減っていく中で、どのように協働して取り組む活動や学習場面を確保するか、またそれらを持続させていくかが課題である。	3.5
	心を通い合わせる	全校の仲がよく、協力して生活できているが、遊び感覚で相手の気持ちを考えない発言をしたり、相手との適切な距離感がつかめなかったりする姿も見られる。また自分から進んで挨拶できなかったりする姿が見られるので来年度への課題にしたい。	3.8
	勤労奉仕	各自が責任をもって分担場所の清掃に取り組んでいた。準備・片付けも全員で協力して行うことができた。決まったところが終わった後、気を利かせたり全体を見渡して動いたりすることがなかなかできなかったので、そのようなことができる場面を増やしていきたい。	3.8
	郷土愛	紅樹山下草刈り、郷土芸能子ども教室、地域環境美化活動等で地域の方や学校協力会の方と一緒に活動することができた。また職場体験学習、福祉体験学習も実施することができ、これまでより地域で学ぶ、地域に学ぶ機会が多かった。	4.3
体	体力向上	週1回のエンジョイタイムでは体を動かすレクを中心に行うことができたが、年間を通した計画的な体力向上の取り組みとはならなかった。特に部活動を行う日が減る冬場の体力向上についてが今後の課題である。	3.6
	健康安全	感染症予防の対策が習慣化して継続されており、感染症の流行はなかった。防災意識に関しても計画的な各種訓練に真剣に取り組むことができた。しかし就寝時間が遅いなどの生活習慣に関する課題や、防犯意識の低さも一部で見られた。	3.7

学校運営	組織・校務分掌	これまでも取り組んできた業務の効率化をより進め、生徒理解や授業作りに時間をかけることができた。特にクラスルームの運用は学校内だけでなく新野小との共有も行ったことで、来年度の小中一貫化にも備えることができた。来年度は小中一貫化により、小中職員での連携も必要になってくるため、積極的なチーム対応を心がけたい。
	連携・情報発信	ホームページの随時更新と、各種通信の定期的な発行により、適時性のある情報発信ができた。またクラスルームとオクレンジャーを適宜利用することができた。引き続き、ICT機器を上手く使った情報発信に努めていきたい。小中一貫化により、児童会・生徒会活動や学校行事での小中合同参加が増えるが、交流や連携のねらいを明確にして、無理のない連携となるよう意識していきたい。